

「開会挨拶」

株式会社 MTI 代表取締役 社長 五十嵐 誠

我が社が主催いたしますテクノフォーラムも今回で 5 回目を迎えましたが、これまでと同様にたくさんの皆様にご参加頂き心から御礼を申し上げます。皆様ご存知のように、このテクノフォーラムでは、MTIが行っております数多くの研究開発の中から、この 1 年の成果の一部を皆様に紹介をさせて頂いております。

海運業を巡る環境は常に日々変化しておりますが、皆様もよくご承知のように、過去 10 年間の変化は、過去に例を見ない激しいものでありました。未曾有の好況から、リーマンショックを引き金とした、大需給アンバランスへ環境が激変し、海運各社は生き残りのための各種対応を要求されるのと同時に、平行して環境面での対応を厳しく要請されるなど、好むと好まざるとにかかわらず、従来に比べて何倍ものスピード感で会社全体の戦略を描き変えていくことが求められるようになりました。

そのキーワードは他産業に比べれば周回遅れの感はありますが、遅ればせながら「差別化」に収斂してきていると思います。これに従い、それを支える技術力の重要性、派生的に研究開発力の取り組みへの重要性が、従来とは比較にならない程高まってきており、MTIとしても、それを十分に認識し、期待にこたえるべく日々研究開発に取り組んでおります。

このような環境変化に対応するために、本年 4 月従来の船舶技術ユニットを、二つに分け、従来同様船舶のハード面での研究を担当する船舶・海洋グループと、(この「海洋」という言葉には研究範囲をいわゆる海洋部門に拡張させたいという思いをこめさせていただいておりますが)、最近富に研究テーマが拡大している船舶運航の情報、ソフト面に特化した船舶情報グループといたしました。また、いまや海運クラスターの一大集積地となりましたシンガポールに初の海外拠点を設置いたしました。

また、振動台ビジネスに加え、NYK/MTI内に蓄積した成果物の販売、およびコンサルテーション等の営業活動を強化すべく、営業グループを新設いたしました。

今回発表するものは、その中のほんの一部ではありますが、本年は船底の空気潤滑をめぐる研究開発で、日本郵船、大島造船所殿と共同で、日本経済新聞社の地球環境賞最優秀賞を受賞、またその研究開発の具体的成果である本船「SOYO」が本年度の「SHIP OF THE YEAR」に選定されるなど、外部からも一定の評価を頂くことができるまでになりました。

運航会社である日本郵船の技術研究開発機能分社であるMTIには、ユーザーとしてのニーズに対する近さという大きなメリットがある一方、全ての研究を造船所さん、船用メーカーさんなどに助けていただかなければならないという側面も持っております。

皆様には、MTIを海運・物流をめぐる技術のニーズとシーズが統合できる場としてご理解頂き、今後とも一層のご協力を頂けると幸いです。尚、ご参考までに弊社のロゴマークは、二つの顔のようなものが向き合う形となっておりますが、これはニーズとシーズの統合を意味致しております。